

論文審査の要旨および担当者

愛知学院大学

報告番号	① 第 号	論文提出者名	中原 晋一
論文審査 委員氏名	主査 夏目 長門 副査 千田 彰 服部 正巳		
論文題名	口唇裂、口唇口蓋裂発生の左右差に関する検討		

インターネットの利用による公表用

口唇、口蓋裂の病因は未だ明らかではないが、遺伝的要因、環境的要因が、それぞれ積み重なり、ある一定のしきい値を超えた時に口唇口蓋裂が発生するという多因子しきい説が有力視されている。口唇口蓋裂の研究としてこれまでに遺伝的要因、環境的要因さらに抑制因子についての研究がなされてきており、これらの研究のスタートラインとして疫学研究は非常に重要であるが、多くの疫学的研究は口唇裂、口唇口蓋裂、口蓋裂といった裂型間の比較しかなされていなかった。

本研究は、先行研究をふまえ、披裂パターン法により、未だ明らかにされていなかった、口唇裂の左右差と性の関係、また、生下時体重につき分析を行った。

1989年～2016年の期間に愛知学院大学歯学部附属病院を受診した口唇、口蓋裂患者を対象とし、調査用紙から裂型、裂側、性別等の疫学データを収集して集計した。また、16コードの披裂パターンにより分類できた症例については、披裂パターン法にて分析した。さらに生下時体重を裂型別に比較した。

その結果をデータベースの概要、裂型別性差、裂側、男女間における裂側の比較、披裂パターンによる分析、生下時体重の裂型別比較の6項目に分け論述していた。

1. データベースの概要

データベースに登録された口唇口蓋裂患者の中で詳細が明らかな症例は

4,321例であった。この内、男性は2,285例(52.9%)、女性2,036例(47.1%)であり、裂型別では、口唇裂が1,435例(33.2%)、口唇口蓋裂が1,820例(42.1%)、口蓋裂が1,066例(24.7%)であった。

2. 裂型別性差

裂型別の性差は、口唇裂が男性53.1%、女性46.9%、口唇口蓋裂が男性60.8%、女性39.2%、口蓋裂が男性39.1%、女性60.9%であった。

3. 裂側

口唇裂、口唇口蓋裂に関してその裂側を見てみると、口唇裂は左側が55.1%、右側が32.7%、両側が12.2%、口唇口蓋裂は左側が44.4%、右側が24.7%、両側が30.9%であった。

4. 男女間における裂側の比較

片側性口唇裂、口唇口蓋裂について、さらに男女間で左右差を比較したところ、顎裂の無い口唇裂では、男性が左側55.3%、右側44.7%、女性が左側63.6%、右側36.4%、口唇裂全体では、男性が左側59.3%、右側40.7%、女性が左側66.7%、右側33.3%と両者において左側が多いことには変わりはないものの、男性の左右差が女性と比較し有意に小さい結果となった。

5. 披裂パターンによる分析

披裂パターンの記録のあった症例は、顎裂の無い口唇裂で647例中304例、顎裂の有る口唇裂で788例中634例、口唇口蓋裂で1,821例中822例、口蓋裂で1,066例中819例であった。

この内、顎裂の有る片側性口唇裂において、男女比で検定を行った所、「L1～2、A1」、「L4～5、A3～4」、「L1～2、A1～2」では男性に有意に多く、「L4～6、A3～4」、「L1～3、A1～2」では女性に有意に多い結果となった。また、口蓋裂においては、「SMCP」、「P1」では男性の比率が有意に高く、「P1～2」、「P1～3」は女性の比率が有意に高かった。

6. 生下時体重の裂型別比較

生下時体重が明らかな 439 名を対象に、裂型別に比較した所、口蓋裂の有無で有意差を認める結果となった。なお、在胎日数は各群間で有意差を認めなかった。

これらの結果をふまえ、裂型分布、裂型別性差、裂側においては従来の報告の多くと同様であり、今回の結果が、日本人における口唇、口蓋裂の標準的な集団としてのデータベースになっていると類推された。また、これまで報告のなかった男女間における裂側の左右差に言及し、片側性口唇裂において、左側が多いことに変わりはないが、男性の左右差が女性と比較し有意に小さい事を見出し、今回の結果は顔面動脈の発育や分布が男女間で異なることに起因する可能性を示唆していると考察していた。

披裂パターンによる分析では、女性の披裂は男性より重度になりやすい可能性を発見していた。

生下時体重の裂型別比較では、口蓋裂を有するものは、口蓋裂を有さないものと比較し、生下時体重が小さい値となったことより、体重の増加に

影響をおよぼす何らかの因子が、口蓋裂の発生にも関与している可能性が示唆されたと考察していた。

本調査の結果、中原晋一は以下のように結論付けた。

1. 裂型、性差、裂側については、過去の報告と同様の結果であった。
2. 口唇裂の裂側において、左側が多いことに変わりはないものの、女性の左右差が男性と比較し有意に大きいことが明らかとなった。
3. 披裂パターンでさらに細かく分類することで、男性と女性で披裂の程度に違いがあることを発見した。即ち顎裂の有る片側性口唇裂ならびに口蓋裂において女性で有意に披裂が重度であった。
4. 生下時体重を裂型別に比較した所、口蓋裂がない群は口蓋裂がある群より有意に大きかった。

以上の結果より本研究は、歯科保存学、歯科補綴学、口腔外科学および関連諸学に寄与するところが大きいの。よって、本論文は博士（歯学）の学位授与に値するものと判定した。

電子媒体添付用表紙

愛知学院大学

報告番号	甲 第 号	氏 名	中原 晋一
本 籍	愛知県		
提出論文題名	口唇裂、口唇口蓋裂発生の左右差に関する検討		
掲 載 誌 名	愛知学院大学大学院歯学研究科学位論文集		
	主 査 夏目 長門 副 査 千田 彰 服部 正巳		